

俳句 大津俳句会

阿蘇五岳のこして霽^はれてゆきし霧

井芹眞一郎

三日月の尖りし先も未だ闇

秋山 恵子

一日を主客に置かれ敬老日

江藤 みち

デイサービス皆を迎へる濃竜胆

大塚喜久子

浮雲に紛れ噴煙秋晴れし

坂本 セキ

少しづつ柿に色さす野辺の風

佐賀 久子

枯草の色はすべてを許すいろ

原田 順子

カルデラを埋めつくしたる稲薙

堀川 妙子

秋天や西も東も茜雲

松尾 昭雅

ほととぎす嶺^ね々を大きく揺るがして

武藤 規子

俳句 つのはな句会

ひらく掌に母のからさの新涼来

星永 文夫

硝子戸に老いの自画像ゆがむ秋

木庭 杏子

愚鈍なる山椒魚のごと生きる

上杉 波

五線紙にたましいの音ひびき秋

矢島 道子

夏富士へ登ればピカソの青い空

水野 春子

鈴鳴らす空にひびけと実る秋

梅木トキエ

ふるさとの白米に胡瓜海が見える

塚本 洋子

手相見はおおむね不幸山椒の実

酒井 豊美

発つ帰燕空いっばいに示^し威飛行

志賀 孝子

八月や付箋の多い日記帳

田上 公代

短歌 大津短歌会

住みなれし家なくなりて一人立ち

静かに過去を思い巡らす

豊岡ミツル

切られたる楠の枝ゆきゆき片付ける

ユンボはつゆの雨に濡れつつ

渡辺佐代子

父母眠る里の小路にこの夏も

木槿^{むくげ}咲きおり猛暑に堪えて

岩下 文代

意に添わぬ移植をしたる蠟梅に

芽吹き新たな命か萌ゆる

吉永 恵子

自捨の吾優しく集う姫らの

余生の日々は安けくあれと

管野 静

齢い坂と思わず知らず越え来たし

試練の坂と思いついて進む

小平 善行

短歌 万年青短歌会

身に負えるさだめあやふく生きつぎて

今ある吾と祈りをささぐ

山内 信子

三人の姪と四人の船の旅

遠く奄美を思う今宵は

立野 誠子

師の君と友の笑顔がほんのりと

桜色して祝宴に映ゆ

中山 春代

妹と母の忌日を共にして

百日紅の花も群れ咲く

大林 律

ウオーキング励む日毎の朝六時

並木木に見る蟬の抜け殻寂し

磯崎テル子

梅雨の雨さ程は降らず安堵する

地震に裂け目の多き阿蘇^{あそ}山見れば

合志 妙子

店ならば道すがら見し渡月橋

あふるる濁流テレビに映る

合志 桃花